

※著作権消滅作品(PD)

ヴィヨンの妻

太宰 治

iNovel

電子書籍化 楓出版
収録 青空文庫

あわただしく、玄関をあける音が聞えて、私はその音で、眼をさました。それは泥酔の夫の、深夜の帰宅にきまつているのでございすから、そのまま黙って寝ていました。

夫は、隣の部屋に電気をつけ、はあっはあっ、とすさまじく荒い呼吸をしながら、机の引出しや本箱の引出しをあけて掻きまわし、何やら捜している様子でしたが、やがて、どたりと畳に腰をおろして坐ったような物音が聞えまして、あとはただ、はあっはあっという荒い呼吸ばかりで、何をしている事やら、私が寝たまま、

「おかえりなさいまし。ごはんは、おすみですか？ お戸棚に、おむす

びがございますけど」

と申しますと、

「や、ありがとう」といつになく優しい返事をいたしまして、「坊やはどうです。熱は、まだありますか？」とたずねます。

これも珍らしい事でございました。坊やは、来年は四つになるのですが、栄養不足のせいか、または夫の酒毒のせいか、病毒のせいか、よその二つの子供よりも小さいくらいで、歩く足許あしもとさえおぼつかなく、言葉もウマウマとか、イヤイヤとかを言えるくらいが関の山で、脳が悪いのではないかとも思われ、私はこの子を銭湯に連れて行きはだかにして抱き上げて、あんまり小さく醜くや痩せているので、凄しくさびなつて、おおぜいの人の前で泣いてしまった事さえございました。そうしてこの子は、

しよつちゅう、おなかをこわしたり、熱を出したり、夫は殆ど家に落ち
ついている事は無く、子供の事など何と思つてゐるのやら、坊やが熱を
出しまして、と私が言つても、あ、そう、お医者连接到行つたらいい
でしょう、と言つて、いそがしげに二重廻しを羽織つてどこかへ出掛け
てしまいます。お医者连接到行きたくつても、お金も何も無いのです
から、私は坊やに添寝して、坊やの頭を黙つて撫なでてやつてゐるより他
は無いのでございます。

けれどもその夜はどういうわけか、いやに優しく、坊やの熱はどうだ、
など珍らしくたずねて下さつて、私はうれしいよりも、何だかおそろし
い予感で、脊筋が寒くなりました。何とも返辞の仕様が無く黙つていま
すと、それから、しばらくは、ただ、夫の烈はげしい呼吸ばかり聞えていま

したが、

「ごめん下さい」

と、女のほそい声が玄関で致します。私は、総身に冷水を浴びせられたように、ぞっとしました。

「ごめん下さい。おおたに 大谷さん」

こんどは、ちよつと鋭い語調でした。同時に、玄関のあく音がして、
「大谷さん！ いらつしゃるんでしょう？」

と、はつきり怒っている声で言うのが聞えました。

夫は、その時やつと玄関に出た様子で、

「なんだい」

と、ひどくおどおどしているような、まの抜けた返辞をいたしました。

「なんだいではありませんよ」と女は、声をひそめて言い、「こんな、ちゃんとしたお家もあるくせに、どろぼうを働くなんて、どうした事です。ひとのわるい冗談はよして、あれを返して下さい。でなければ、私はこれからすぐ警察に訴えます」

「何を言うんだ。失敬な事を言うな。ここは、お前たちの来るところでは無い。帰れ！ 帰らなければ、僕のほうからお前たちを訴えてやる」

その時、もうひとりの男の声が出ました。

「先生、いい度胸だね。お前たちの来るところではない、とは出かした。^{あき}呆れてものが言えねえや。他の事とは違う。よその家の金を、あんた、冗談にも程度がありますよ。いままでだって、私たち夫婦は、あんたのために、どれだけ苦勞をさせられて来たか、わからねえのだ。それなの

に、こんな、今夜のような情ねえ事をし出かしてくれる。先生、私は見そこないましたよ」

「ゆすりだ」と夫は、威だけ高に言うのですが、その声は震えていました。

「恐喝だ。帰れ！ 文句があるなら、あした聞く」

「たいへんな事を言いやがるなあ、先生、すっかりもう一人前の悪党だ。それではもう警察へお願いするより手がねえぜ」

その言葉の響きには、私の全身鳥肌立ったほどの凄^{すご}い憎悪がこもっていました。

「勝手にしろ！」と叫ぶ夫の声は既に上ずって、空虚な感じのものでした。

私は起きて寝巻きの上に羽織を引掛け、玄関に出て、二人のお客に、

「いらっしやいまし」

と挨拶しました。

「や、これは奥さんですか」

膝きりひざの短い外套がいのとうを着た五十すぎくらいの丸顔の男のひとが、少しも笑わずに私に向つてちよつと首肯うなずくように会釈しました。

女のほうは四十前後の痩せて小さい、身なりのきちんとしたひとでした。

「こんな夜中にあがりまして」

とその女のひとは、やはり少しも笑わずにシヨールをはずして私にお辞儀をかえしました。

その時、矢庭に夫は、下駄を突っかけて外に飛び出ようとしてました。

「おっと、そいつあいけない」

男のひとは、その夫の片腕をとらえ、二人は瞬時もみ合いました。

「放せ！ 刺すぞ」

夫の右手にジャックナイフが光っていました。そのナイフは、夫の愛蔵のものでございまして、たしか夫の机の引出しの中にあつたので、それではさつき夫が家へ帰るなり何だか引出しを掻きまわしていたようでしたが、かねてこんな事になるのを予期して、ナイフを捜し、懷にいらしていたのに、違いありません。

男のひとは身をひきました。そのすきに夫は大きい鴉からすのように二重廻しの袖をひるがえして、外に飛び出しました。

「どろぼうー！」

と男のひとは大声を挙げ、つづいて外に飛び出そうとしましたが、私

は、はだしで土間に降りて男を抱いて引きとめ、

「およしなさいまし。どちらにもお怪我があつては、なりませぬ。あと
の始末は、私がいたします」

と申しますと、傍から四十の女のひと、

「そうですね、とうさん。気持ちがいに刃物です。何をするかわかりません」
と言いました。

「ちきしょう！ 警察だ。もう承知できねえ」

ぼんやり外の暗闇を見ながら、ひとりごとのようにそう呟つぶやき、けれど
も、その男のひとの総身の力は既に抜けてしまっていました。

「すみません。どうぞ、おあがりになって、お話を聞かして下さいまし」
と言って私は式台にあがってしゃがみ、

「私でも、あとの始末は出来るかも知れませんから。どうぞ、おあがりになって、どうぞ。きたないところですけど」

二人の客は顔を見あわせ、幽かすかに首肯き合つて、それから男のひとは様子をあらため、

「何とおっしゃつても、私どもの気持は、もうきまつています。しかし、これまでの経緯いきざつは一応、奥さんに申し上げて置きます」

「はあ、どうぞ。おあがりになって。そうして、ゆつくり」

「いや、そんな、ゆつくりもしておられません」

「と言ひ、男のひとは外套を脱ぎかけました。」

「そのままで、どうぞ。お寒いんですから、本当に、そのままで、お願いします。家の中には火の気が一つも無いのでございますから」

「では、このままで失礼します」

「どうぞ。そちらのお方も、どうぞ、そのままです」

男のひとがさきに、それから女のひとが、夫の部屋の六畳間にはいり、腐りかけているような畳、破れほうだいの障子、落ちかけている壁、紙がはがれて中の骨が露出している襖、片隅に机と本箱、それもからつぽの本箱、そのような荒涼たる部屋の風景に接して、お二人とも息を呑んだような様子でした。

破れて綿のはみ出ている座蒲団ざふとんを私はお二人にすすめて、

「畳が汚うございますから、どうぞ、こんなものでも、おあてになつて」と言い、それから改めてお二人に御挨拶を申しました。

「はじめてお目にかかります。主人がこれまで、たいへんなご迷惑ばかり

りおかけしてまいりましたようで、また、今夜は何をどう致しました事やら、あのようなおそろしい真似などして、おわびの申し上げ様もございませんぬ。何せ、あのような、変った氣象の人なので」

と言いかけて、言葉がつまり、落涙しました。

「奥さん。まことに失礼ですが、いくつにおなりで？」

と男のひとは、破れた座蒲団に悪びれず大あぐらをかいて、肘ひじをその膝の上に立て、こぶしで顎あごを支え、上半身を乗り出すようにして私に尋ねます。

「あの、私でございますか？」

「ええ。たしか旦那は三十、でしたね？」

「はあ、私は、あの、……四つ下です」

「すると、二十、六、いやこれはひどい。まだ、そんなですか？ いや、

その筈だ。はず旦那が三十ならば、そりゃその筈だけど、おどろいたな」

「私も、さきほどから」と女のひとは、男のひとの脊中の蔭から顔を出すようにして、「感心しておりました。こんな立派な奥さんがあるのに、
どうして大谷さんは、あんなに、ねえ」

「病気だ。病気なんだよ。以前はあれほどでもなかったんだが、だんだん悪くなりやがった」

と言つて大きい溜息ためいきをつき、

「実は、奥さん」とあらたまつた口調になり、「私も夫婦は、中野駅の近くに小さい料理屋を經營してゐまして、私もこれも上州の生れで、私はこれでも堅氣のあきんどだったのでございますが、道樂氣が強い、と

いうのでございましょうか、田舎のお百姓を相手のケチな商売にもいや気がさして、かれこれ二十年前、この女房を連れて東京へ出て来まして、浅草の、或る料理屋に夫婦ともに住込みの奉公をはじめまして、まあ人並に浮き沈みの苦勞をして、すこし蓄えも出来ましたので、いまのあの中野の駅ちかくに、昭和十一年でしたか、六畳一間に狭い土間附きのまことにむさくるしい小さい家を借りまして、一度の遊興費が、せいぜい一円か二円の客を相手の、心細い飲食店を開業いたしまして、それでもまあ夫婦がぜいたくもせず、地道に働いて来たつもりで、そのおかげか焼酎しょうちゅうやらジンやらを、割にどつさり仕入れて置く事が出来まして、その後の酒不足の時代になりましたから、よその飲食店のように転業なぞせずに、どうやら頑張つて商売をつづけてまいりまして、また、そう

なると、ひいきのお客もむきになって応援をして下さって、所謂^{いわゆる}あの軍官の酒さかなが、こちらへも少しずつ流れて来るような道を、ひらいて下さるお方もあり、対米英戦がはじまって、だんだん空襲がはげしくなつて来てからも、私どもには足手まといの子供は無し、故郷へ疎開などする気も起らず、まあこの家が焼ける迄^{まで}は、と思つて、この商売一つにかじりついて来て、どうやら罹^{りさい}災もせず終戦になりましたのでほつとして、こんどは大ぴらに闇酒を仕入れて売っているという、手短かに語ると、そんな身の上の人間なのでございます。けれども、こうして手短かに語ると、さして大きな難儀も無く、割に運がよく暮して来た人間のようにお思ひになるかも知れませんが、人間の一生は地獄でございました、寸善尺魔、とは、まったく本当の事でございますね。一寸^{いっすん}の仕合せには一

尺の魔物が必ずくつついてまいります。人間三百六十五日、何の心配も無い日が、一日、いや半日あったら、それは仕合せな人間です。あなたの旦那の大谷さんが、はじめて私どもの店に来ましたのは、昭和十九年の、春でしたか、とにかくその頃はまだ、対米英戦もそんなに負けいくさでは無く、いや、そろそろもう負けいくさになっていたのでしょうか、私たちにはそんな、実体、ですか、真相、ですか、そんなものはわからず、ここ二、三年頑張れば、どうにかこうにか対等の資格で、和睦わぼくが出来るくらいに考えていまして、大谷さんがはじめて私どもの店にあらわれた時にも、たしか、久留米くるめがすり緋の着流しに二重廻しを引っかけていた筈で、けれども、それは大谷さんだけでなく、まだその頃は東京でも防空服装で身をかためて歩いている人は少く、たいてい普通の服装でのんきに外

出できた頃でしたので、私どもも、その時の大谷さんの身なりを、別段
だらし無いとも何とも感じませんでした。大谷さんは、その時、おひと
りではございませんでした。奥さんの前ですけれども、いや、もう何も
包みかくし無く洗いざらい申し上げましょう、旦那は、或る年増女に連
れられて店の勝手口からこつそりはいつてまいりましたのです。もつと
も、もうその頃は、私どもの店も、毎日おもての戸は閉めつきりで、そ
の頃のはやり言葉で言うところと閉店開業というやつで、ほんの少数の馴染客
だけ、勝手口からこつそりはいい、そうしてお店の土間の椅子席でお酒
を飲むという事は無く、奥の六畳間で電気を暗くして大きい声を立てず
に、こつそり酔っぱらうという仕組になっていました、また、その年増
女というのは、そのすこし前まで、新宿のバアで女給さんをしていたひ

とで、その女給時代に、筋のいいお客を私の店に連れて来て飲ませて、私の家の馴染にしてくれるという、まあ蛇^{じゃ}の道はへび、という工合いの附合いをしておりまして、そのひとのアパートはすぐ近くでしたので、新宿のバアが閉鎖になって女給をよしましてからも、ちよいちよい知合いの男のひとを連れてまいりまして、私どもの店にもだんだん酒が少くなり、どんなに筋のいいお客でも、飲み手がふえるというのは、以前ほど有難くないばかりか、迷惑にさえ思われたのですが、しかし、その前の四、五年間、ずいぶん派手な金遣いをするお客ばかり、たくさん連れて来てくれたのでございますから、その義理もあつて、その年増のひとから紹介された客には、私どもも、いやな顔をせずお酒を差し上げる事にしていたのでした。だから旦那がその時、その年増のひと、秋ちゃん、

といいますが、そのひとに連れられて裏の勝手口からこつそりはいって来ても、別に私どもも怪しむ事なく、れいのおり、奥の六畳間に上げて、焼酎を出しました。大谷さんは、その晩はおとなしく飲んで、お勘定は秋ちゃんに払わせて、また裏口からふたり一緒に帰って行きました。が、私には奇妙にあの晩の、大谷さんのへんに静かで上品な素振りが忘れられません。魔物がひとの家にはじめて現われる時には、あんなひっそりした、ういういしいみたいな姿をしているものなのでしょうか。その夜から、私どもの店は大谷さんに見込まれてしまったのでした。それから十日ほど経って、こんどは大谷さんがひとりで裏口からまいりまして、いきなり百円紙幣を一枚出して、いやその頃はまだ百円と言えば大金でした、いまの二、三千円にも、それ以上にも当る大金でした、それ

を無理矢理、私の手に握らせて、たのむ、と言つて、氣弱そうに笑うのです。もう既に、だいぶ召上つている様子でしたが、とにかく、奥さんもご存じでしょう、あんな酒の強いひとはありません。酔つたのかと思うと、急にまじめな、ちゃんと筋のおつた話をするし、いくら飲んでも、足もとがふらつくなんて事は、ついぞ一度も私どもに見せた事は無いのですからね。人間三十前後は謂いわば血氣のさかりで、酒にも強い年頃ですが、しかし、あんなのは珍らしい。その晩も、どこかよそで、かなりやつて来た様子なのに、それから私の家で、焼酎を立てつづけに十杯も飲み、まるでほとんど無口で、私ども夫婦が何かと話しかけても、ただはにかむように笑つて、うん、うん、とあいまいに首肯き、突然、何時なんじですか、と時間をたずねて立ち上り、お釣を、と私が言いますと、いや、

いい、と言ひ、それは困ります、と私が強く言いましたら、にやつと笑つて、それではこの次まであずかつて置いて下さい、また来ます、と言つて帰りましたが、奥さん、私どもがあなのひとからお金をいただいたのは、あとにもさきにも、ただこの時いちど切り、それからもう、なんだかんだとごまかして、三年間、一銭のお金も払わずに、私どものお酒をほとんどひとりで、飲みほしてしまつたのだから、呆れるじゃありませんか」

思はず、私は、噴き出しました。理由のわからない可笑^{おか}さが、ひよいとこみ上げて来たのです。あわてて口をおさえて、おかみさんのほうを見ると、おかみさんも妙に笑つてうつむきました。それから、ご亭主も、仕方無さそうに苦笑いして、

「いや、まったく、笑い事では無いんだが、あまり呆れて、笑いたくもなりません。じっさい、あれほどの腕前を、他のまともな方面に用いたら、大臣にでも、博士にでも、なんにでもなれますよ。私ども夫婦ばかりでなく、あの人に見込まれて、すってんてんになってこの寒空に泣いている人間が他にもまだまだある様子だ。げんにあの秋ちゃんなど、大谷さんと知合ったばかりに、いいパトロンには逃げられるし、お金も着物も無くしてしまうし、いまはもう長屋の汚い一部屋で乞食みたいな暮しをしているそうだが、じっさい、あの秋ちゃんは、大谷さんと知合った頃には、あさましいくらいのぼせて、私たちにも何かと吹聴していたものです。だいいち、ご身分が凄い。四国の或る殿様の別家の、大谷男爵の次男で、いまは不身持のため勘当せられているが、いまに父の男爵が死

ねば、長男と二人で、財産をわける事になっている。頭がよくて、天才、
というものだ。二十一で本を書いて、それが石川啄木たくぼくという大天才の書
いた本よりも、もっと上手で、それからまた十何冊だかの本を書いて、
としては若いけれども、日本一の詩人、という事になっている。おまけに
大学者で、学習院から一高、帝大とすすんで、ドイツ語フランス語、い
やもう、おっそろしい、何が何だか秋ちゃんに言わせるとまるで神様み
たいな人で、しかし、それもまた、まんざら皆うそではないらしく、他
のひとから聞いても、大谷男爵の次男で、有名な詩人だという事に変り
はないので、こんな、うちの婆まで、いいとしをして、秋ちゃんと競争
してのぼせ上って、さすがに育ちのいいお方はどこか違っていらっしや
る、なんて言って大谷さんのおいでを心待ちにしているいたらくなん

ですから、たまりません。いまはもう、華族もへつたくれも無くなつたようですが、終戦前までは、女を口説くには、とにかくこの華族の勘当息子という手に限るようでした。へんに女が、くわつとなるらしいんです。やっぱりこれは、その、いまはやりの言葉で言えば奴隷根性というものなんでしょうね。私なんぞは、男の、それも、すれっからしと来ているのでございますから、たかが華族の、いや、奥さんの前ですけれども、四国の殿様のそのまた分家の、おまけに次男なんて、そんなのは何も私たちと身分のちがいがある筈が無いと思つていますし、まさかそんな、あさましく、くわつとなつたりなどはしやしません。ですけれども、やはり、何だかどうもあの先生は、私にとつても苦手にがてでして、もうこんどこそ、どんなにたのまれてもお酒は飲ませまいと固く決心していても、

追われて来た人のように、意外の時刻にひよいとあらわれ、私どもの家へ来てやつとほっとしたような様子をするのを見ると、つい決心もにぶつてお酒を出してしまうのです。酔つても、別に馬鹿騒ぎをするわけじゃないし、あれでお勘定さえきちんとしてくれたら、いいお客なんですがねえ。自分で自分の身分を吹聴するわけでもないし、天才だのなんだのそんな馬鹿げた自慢をした事ありませんし、秋ちゃんなんか、あの先生の傍で、私どもに、あの人の偉さに就いて広告したりなどすると、僕はお金がほしいんだ、ここの勘定を払いたいんだ、とまるつきり別な事を言つて座を白けさせてしまいます。あの人が私どもに今までお酒の代を払った事はありませんが、あのひとのかわりに、秋ちゃんが時々支払って行きますし、また、秋ちゃんの他にも、秋ちゃんに知られては

困るらしい内緒の女のひともありまして、そのひとはどこかの奥さんの
ようで、そのひとも時たま大谷さんと一緒にやって来まして、これもま
た大谷さんのかわりに、過分のお金を置いて行く事もありまして、私ど
もだって、商人でございますから、そんな事でもなかった日には、いく
ら大谷先生であろうが宮様であろうが、そんなにいつまでも、ただで飲
ませるわけにはまいりませんのです。けれども、そんな時たまの支払い
だけでは、とても足りるものではなく、もう私どもの大損で、なんでも
小金井に先生の家があつて、そこにはちゃんとした奥さんもいらつしや
るという事を聞いていましたので、いちどそちらへお勘定の相談にあが
ろうと思つて、それとなく大谷さんにお宅はどのへんでしようと、たず
ねる事もありましたが、すぐ勘附いて、無いものは無いんだよ、どうし

てそんなに気をもむのかね、喧嘩けんかわかれは損だぜ、などと、いやな事を言います。それでも、私どもは何とかして、先生のお家だけでも突きとめて置きたくて、二、三度あとをつけてみた事もありましたが、そのたんに、うまく巻かれてしまうのです。そのうちに東京は大空襲の連続という事になりました、何が何やら、大谷さんが戦闘帽などかぶって舞い込んで来て、勝手に押入れの中からブランデーの瓶なんか持ち出して、ぐいぐい立ったまま飲んで風のように立ち去ったりなんかして、お勘定も何もあったものでなく、やがて終戦になりましたので、こんどは私どもも大っぴらで闇の酒さかなを仕入れて、店先には新しいのれんを出し、いかに貧乏の店でも張り切って、お客への愛嬌あいぎょうに女の子をひとり雇ったり致しましたが、またもや、あの魔物の先生があらわれまして、こんど

は女連れでなく、必ず二、三人の新聞記者や雑誌記者と一緒にまいりまして、なんでもこれからは、軍人が没落して今まで貧乏していた詩人などが世の中からもてはやされるようになったとかいうその記者たちの話でございまして、大谷先生は、その記者たちを相手に、外国人の名前だか、英語だか、哲学だか、何だかわけのわからないような、へんな事を言つて聞かせて、そうしてひよいと立つて外へ出て、それつきり帰りません。記者たちは、興覚め顔に、あいつどこへ行きやがったんだろう、そろそろおれたちも帰ろうか、など帰り支度をはじめ、私は、お待ち下さい、先生はいつもあの手で逃げるのです、お勘定はあなたたちから戴きます、と申します。おとなしく皆で出し合つて支払つて帰る連中もあります、大谷に払わせろ、おれたちは五百円生活をしているんだ、と

言つて怒る人もあります。怒られても私は、いいえ、大谷さんの借金が、いままでいくらになっているかご存じですか？　もしあなたたちが、その借金をいくらでも大谷さんから取つて下さつたら、私は、あなたたちに、その半分は差し上げます、と言いますと、記者たちも呆れた顔を致しまして、なんだ、大谷がそんなひでえ野郎とは思わなかった、こんどからはあいつと飲むのはごめんだ、おれたちには今夜は金は百円も無い、あした持つて来るから、それまでこれをあずかつて置いてくれ、と威勢よく外套を脱いだりなんかするのでございます。記者というものは柄が悪い、と世間から言われているようですけれども、大谷さんにくらべると、どうしてどうして、正直であつさりして、大谷さんが男爵の御次男なら、記者たちのほうが、公爵の御総領くらいに値打があります。大谷

さんは、終戦後は一段と酒量もふえて、人相がけわしくなり、これまで口にした事の無かったひどく下品な冗談などを口走り、また、連れて来た記者を矢庭に殴って、つかみ合いの喧嘩をはじめたり、また、私どもの店で使っているまだはたち前の女の子を、いつのまにやらだまし込んで手に入れてしまった様子で、私どもも実に驚き、まったく困りましたが、既にもう出来てしまった事ですから泣き寝入りの他は無く、女の子にもあきらめるように言いふくめて、こつそり親御の許にかえしてやりました。大谷さん、何ももう言いません、拝むから、これつきり来ないで下さい、と私が申しましたが、大谷さんは、闇でもうけているくせに人並の口をきくな、僕はなんでも知っているぜ、と下司^{げす}な脅迫がましい事など言いまして、またすぐ次の晩に平気な顔してまいります。私どもも、

大戦中から闇の商売などして、その罰が当って、こんな化け物みたいな人間を引受けなければならなくなったのかも知れませんが、しかし、今晚のような、ひどい事をされては、もう詩人も先生もへったくれもない、どろぼうです、私どものお金を五千円ぬすんで逃げ出したのですからね。いまはもう私どもも、仕入れに金がかかって、家の中にはせいぜい五百円か千円の現金があるくらいのもので、いや本当の話、売り上げの金はすぐ右から左へ仕入れに注ぎ込んでしまわなければならないんです。今夜、私どもの家に五千円などという大金があったのは、もうことしも大みそかが近くなつて来ましたし、私が常連のお客さんの家を廻ってお勘定をもらつて歩いて、やっとそれだけ集めてまいりましたのでして、これはすぐ今夜にでも仕入れのほうに手渡してやらなければ、もう来年の

正月からは私どもの商売をつづけてやって行かれなくなるような、そんな大事な金で、女房が奥の六畳間で勘定して戸棚の引出しにしまったのを、あのひとが土間の椅子席でひとり酒を飲みながらそれを見ていたらしく、急に立つてつかつかと六畳間にあがって、無言で女房を押しのけ引出しをあけ、その五千円の札束をわしづかみにして二重まわしのポケットにねじ込み、私どもがあっけにとられているうちに、さつさと土間に降りて店から出て行きますので、私は大声を挙げて呼びとめ、女房と一緒に後を追ひ、私はこうなればもう、どろぼう！ と叫んで、往來のひとたちを集めてしばつてもらおうかとも思つたのですが、とにかく大谷さんは私どもとは知合いの間柄ですし、それもむごすぎるように思われ、今夜はどんな事があつても大谷さんを見失わないようにどこまで

も後をつけて行き、その落ちつく先を見とどけて、おだやかに話してあの金をかえてしてもらおう「#「かえしてもらおう」は底本では「かえてしてもらおう」、とまあ私どもも弱い商売でございますから、私ども夫婦は力を合せ、やっと今夜はこの家をつきとめて、かんにん出来ぬ氣持をおさえて、金をかえして下さいと、おんびんに申し出たのに、まあ、何という事だ、ナイフなんか出して、刺すぞだなんて、まあ、なんというまたもや、わけのわからぬ可笑しさがこみ上げて来まして、私は声を挙げて笑ってしまいました。おかみさんも、顔を赤くして少し笑いしました。私は笑いがなかなかとまらず、ご亭主に悪いと思いましたが、なんだか奇妙に可笑しくて、いつまでも笑いつづけて涙が出て、夫の詩の中にある「文明の果の大笑い」というのは、こんな氣持の事を言っている

のかしらと、ふと考えました。

二

とにかく、しかし、そんな大笑いをして、すまされる事件ではございませんでしたので、私も考え、その夜お二人に向って、それでは私が何とかしてこの後始末をする事に致しますから、警察沙汰にするのは、もう一日お待ちになって下さいまし、明日そちらさまへ、私のほうからお伺い致します、と申し上げまして、その中野のお店の場所をくわしく聞き、無理にお二人にご承諾をねがいました、その夜はそのままでひとまぐず引きとっていただき、それから、寒い六畳間のまんなかに、ひとり坐つ

て物案じいたしましたが、べつだん何のいい工夫も思い浮びませんでしたので、立って羽織を脱いで、坊やの寝ている蒲団ふとんにもぐり、坊やの頭を撫なでながら、いつまでも、いつまで経つても、夜が明けなければいい、と思いました。

私の父は以前、浅草公園の瓢箪池ひょうたんいけのほとりに、おでんの屋台を出していました。母は早くなくなり、父と私と一人きりで長屋住居をしていて、屋台のほうも父と二人でやっていましたのですが、いまのあの人がときどき屋台に立ち寄って、私はそのうちに父をあざむいて、あの人と、よそで逢うようになりまして、坊やがおなかに出来ましたので、いろいろごたごたの末、どうやらあの人の女房というような形になったものの、もちろん籍も何もはいつておりませんし、坊やは、てて無し児という事

になつていますし、あの人は家を出ると三晩も四晩も、いいえ、ひとつきも帰らぬ事もございまして、どこで何をしている事やら、帰る時は、いつも泥酔していて、真蒼まつさおな顔で、はあつはあつと、くるしそうな呼吸をして、私の顔を黙つて見て、ぽろぽろ涙を流す事もあり、またいきなり、私の寝ている蒲団にもぐり込んで来て、私のからだを固く抱きしめて、「ああ、いかん。こわいんだ。こわいんだよ、僕は。こわい！ たすけてくれ！」

などと言ひまして、がたがた震えている事もあり、眠つてからも、うわごとを言うやら、呻うめくやら、そうして翌あくる朝は、魂の抜けた人みたいにぼんやりして、そのうちにふつといなくなり、それっきりまた三晩も四晩も帰らず、古くからの夫の知合いの出版のほうのお方が二、三人、

そのひとたちが私と坊やの身を案じて下さって、時たまお金を持って来てくれますので、どうやら私たちも飢え死にせずにきょうまで暮してまいましたのです。

とろとろと、眠りかけて、ふと眼をあけると、雨戸のすきまから、朝の光線がさし込んでいるのに気附いて、起きて身支度をして坊やを脊負い、外に出ました。もうとても黙って家の中におられない気持でした。

どこへ行こうというあてもなく、駅のほうに歩いて行って、駅の前の露店で飴^{あめ}を買い、坊やにしゃぶらせて、それから、ふと思いついて吉祥寺までの切符を買って電車に乗り、吊皮^{つりかわ}にぶらさがって何気なく電車の天井にぶらさがっているポスターを見ますと、夫の名が出ていました。

それは雑誌の広告で、夫はその雑誌に「フランソワ・ヴィヨン」という

題の長い論文を発表している様子でした。私はそのフランソワ・ヴィヨンという題と夫の名前を見つめているうちに、なぜだかわかりませぬけれども、とてもつらい涙がわいて出て、ポスターが霞かすんで見えなくなりました。

吉祥寺で降りて、本当にもう何年振りかで井の頭公園に歩いて行つて見ました。池のはたの杉の木が、すっかり伐きり払われて、何かこれから工事でもはじめられる土地みたいに、へんにむき出しの寒々した感じで、昔とすっかり変っていました。

坊やを背中からおろして、池のはたのこわれかかったベンチに二人ならんで腰をかけ、家から持って来たおいもを坊やに食べさせました。

「坊や。綺麗きれなお池でしょ？ 昔はね、このお池に鯉こいトトや金きんトトが、

たくさんたくさんいたのだけれども、いまはなんにも、いないわねえ。
つまらないねえ」

坊やは、何と思ったのか、おいもを口の中に一ぱい頬張ったまま、けけ、と妙に笑いました。わが子ながら、ほとんど阿呆の感じでした。

その池のはたのベンチにいつまでいたって、何のらちのあく事では無し、私はまた坊やを背負って、ぶらぶら吉祥寺の駅のほうへ引返し、にぎやかな露店街を見て廻って、それから、駅で中野行きの切符を買い、何の思慮も計画も無く、謂わばおそろしい魔の淵ふちにするすると吸い寄せられるように、電車に乗って中野で降りて、きのう教えられたとおりの道筋を歩いて行って、あの人たちの小料理屋の前にたどりつきました。

表の戸は、あきませんでしたので、裏へまわって勝手口からはいりま

した。ご亭主さんはいなくて、おかみさんひとり、お店の掃除をしていました。おかみさんと顔が合ったとたんに私は、自分でも思いがけなかった嘘うそをすらすらと言いました。

「あの、おばさん、お金は私が綺麗におかえし出来そうです。今晚か、でなければ、あした、とにかく、はつきり見込みがついたのですから、もうご心配なさらないで」

「おや、まあ、それはどうも」

と言つて、おかみさんは、ちよつとうれしそうな顔をしましたが、それでも何か腑ふに落ちないような不安な影がその顔のどこやらに残っていました。

「おばさん、本当よ。かくじつに、ここへ持つて来てくれるひとがある

のよ。それまで私は、人質になつて、ここにずっといる事になつていますの。それなら、安心でしょう？ お金が来るまで、私はお店のお手伝いでもさせていただくわ」

私は坊やを背中からおろし、奥の六畳間にひとりで遊ばせて置いて、くるくると立ち働いて見せました。坊やは、もともとひとり遊びには馴なれておりますので、少しも邪魔になりません。また頭が悪いせいか、人見知りをしないたちなので、おかみさんにも笑いかけたりして、私がおかみさんのかわりに、おかみさんの家の配給物を取りに行つてあげている留守にも、おかみさんからアメリカの罐詰かんづめの殻を、おもちゃ代りにもらつて、それを叩いたりころがしたりしておとなしく六畳間の隅で遊んでいたようでした。

お昼頃、ご亭主がおさかなや野菜の仕入れをして帰って来ました。私は、ご亭主の顔を見るなり、また早口に、おかみさんに言つたのと同様の嘘を申しました。

ご亭主は、きよとんとした顔になつて、

「へえ？　しかし、奥さん、お金つてものは、自分の手に、握つてみないうちは、あてにならないものですよ」

と案外、しずかな、教えさとするような口調で言いました。

「いいえ、それがね、本当にたしかなのよ。だから、私を信用して、おもて沙汰にするのは、きょう一日待つて下さいな。それまで私は、このお店でお手伝いしていますから」

「お金が、かえつて来れば、そりやもう何も」とご亭主は、ひとりごと

のように言い、「何せことしも、あと五、六日なのですからね」

「ええ、だから、それだから、あの私は、おや？　お客さんですわよ。いらつしやいまし」と私は、店へはいつて来た三人連れの職人ふうのお客に向つて笑いかけ、それから小声で、「おばさん、すみません。エプロンを貸して下さいな」

「や、美人を雇いやがった。こいつあ、凄い」

と客のひとりが言いました。

「誘惑しないで下さいよ」とご亭主は、まんざら冗談でもないような口調で言い、「お金のかかっているからですから」

「百万ドルの名馬か？」

ともうひとりの客は、げびた洒落しやれを言いました。

「名馬も、雌は半値だそうです」

と私は、お酒のお燗かんをつけながら、負けずに、げびた受けこたえを致しますと、

「けんそんなよ。これから日本は、馬でも犬でも、男女同権だつてさ」と一ばん若いお客が、呶鳴どなるように言いまして、「ねえさん、おれは惚ほれた。一目惚れだ。が、しかし、お前は、子持ちだな？」

「いいえ」と奥から、おかみさんは、坊やを抱いて出て来て、「これは、こんど私しんせきどもが親戚しんせきからもらつて来た子ですの。これでもう、やつと私どもにも、あとつぎが出来たというわけですわ」

「金も出来たし」

と客のひとりが、からかいますと、ご亭主はまじめに、

「いゝも出来、借金も出来」と^{つふや}呟き、それから、ふいと語調をかえて、「何にしますか？　よせ鍋^{なべ}でも作りましょうか？」

と客にたずねます。私には、その時、或る事が一つ、わかりました。やはりそうか、と自分でひとり首肯^{うなず}き、うわべは何気なく、お客にお銚子^{ちようし}を運びました。

その日は、クリスマスの、前夜祭とかいうのに当たっていたようで、そのせいか、お客が絶えること無く、次々と参りまして、私は朝からほとんど何一つ戴いておらなかったのですが、胸に思いがいつぱい籠^{こも}っているためか、おかみさんから何かおあがりと勧められても、いい沢山と申しまして、そうしてただもう、くるくると羽衣一まいを纏^{まと}つて舞っているように身軽く立ち働き、自惚^{うぬぼ}れかも知れませぬけれども、

その日のお店は異様に活気づいていたようで、私の名前をたずねたり、また握手などを求めたりするお客さんが二人、三人どころではございませんでした。

けれども、こうしてどうなるのでしょうか。私には何も一つも見当が附いていないのでした。ただ笑って、お客のみだらな冗談にこちらも調子を合せて、更にもっと下品な冗談を言いかえし、客から客へ滑り歩いてお酌して廻って、そうしてそのうちに、自分のこのからだがアイスクリームのように溶けて流れてしまえばいい、などと考えるだけでございました。

奇蹟はやはり、この世の中にも、ときたま、あらわれるものらしゅうございます。

九時すこし過ぎくらいの頃でございましたでしょうか。クリスマスの
お祭りの、紙の三角帽をかぶり、ルパンのように顔の上半分を覆いかく
している黒の仮面をつけた男と、それから三十四、五の痩せ^や型の綺麗な
奥さんと二人連れの客が見えまして、男のひとは、私どもには後向きに、
土間の隅の椅子に腰を下しましたが、私はその人がお店にはいつてくる
と直ぐに、誰だか解りました。どろぼうの夫です。

向うでは、私のことに何も気附かぬようでしたので、私も知らぬ振り
して他のお客とふざけ合い、そうして、その奥さんが夫と向い合つて腰
かけて、

「ねえさん、ちよつと」

と呼びましたので、

「へえ」

と返辞して、お二人のテーブルのほうに参りまして、

「いらつしやいまし。お酒でございますか？」

と申しました時に、ちらと夫は仮面の底から私を見て、さすがに驚いた様子でしたが、私はその肩を軽く撫でて、

「クリスマスおめでとうつて言うの？　なんていうの？　もう一升くらいは飲めそうね」

と申しました。

奥さんはそれには取り合わず、改まった顔つきをして、

「あの、ねえさん、すみませんがね、ここのご主人にないないお話し申したい事がございますのですけど、ちよつとここへご主人を」

と言いました。

私は奥で揚物あげものをしているご亭主のところへ行き、

「大谷が帰ってまいりました。会ってやって下さいまし。でも、連れの女のかたに、私のことは黙っていて下さいね。大谷が恥かしい思いをするといけませんから」

「いよいよ、来ましたね」

ご亭主は、私の、あの嘘を半ばは危あやふみながらも、それでもかなり信用してしてくれたもののようで、夫が帰って来たことも、それも私の何か差しがねに依つての事と単純に合点している様子でした。

「私のことは、黙っててね」

と重ねて申しますと、

「そのほうがよろしいのでしたら、そうします」

と気さくに承知して、土間に出て行きました。

ご亭主は土間のお客を一わたりざつと見廻し、それから真つ直ぐに夫のいるテーブルに歩み寄つて、その綺麗な奥さんと何か二言、三言話を交して、それから三人そろつて店から出て行きました。

もういいのだ。万事が解決してしまつたのだと、なぜだかそう信ぜられて、さすが流石にうれしく、こんがすり紺紺の着物を着たままだはたち前くらいの若いお客さんの手首を、だしぬけに強く掴つかんで、

「飲みましょうよ、ね、飲みましょう。クリスマスですもの」

ほんの三十分、いいえ、もっと早いくらい、おや、と思ったくらいに早く、ご亭主がひとりで帰って来まして、私の傍に寄り、

「奥さん、ありがとうございます。お金はかえして戴きました」

「そう。よかったわね。全部？」

ご亭主は、へんな笑い方をして、

「ええ、きのうの、あの分ぶんだけはね」

「これまでのが全部で、いくらなの？　ざっと、まあ、大負けに負けて」

「二万円」

「それだけでいいの？」

「大負けに負けました」

「おかえし致します。おじさん、あすから私を、ここで働かせてくれない？
ね、そうして！　働いて返すわ」

「へえ？　奥さん、とんだ、おかるだね」

私たちは、声を合せて笑いました。

その夜、十時すぎ、私は中野の店をおいとまして、坊やを背負い、小金井の私たちの家にかえりました。やはり夫は帰って来ていませんでしたが、しかし私は、平気でした。あすまた、あのお店へ行けば、夫に逢えるかも知れない。どうして私はいままで、こんないい事に気づかなかつたのかしら。きのうまでの私の苦労も、所詮しよせんは私が馬鹿で、こんな名案に思いつかなかつたからなのだ。私だって昔は浅草の父の屋台で、客あ

しらいは決して下手ではなかったのだから、これからあの中野のお店できつと巧く立ちまわれるに違いない。現に今夜だつて私は、チップを五百円ちかくもらつたのだから。

ご亭主の話に依ると、夫は昨夜あれから何処か知合いの家へ行つて泊つたらしく、それから、けさ早く、あの綺麗な奥さんの営んでいる京橋のバーを襲つて、朝からウイスキーを飲み、そうして、そのお店に働いている五人の女の子に、クリスマス・プレゼントだと言つて無闇にお金をくれてやつて、それからお昼頃にタキシードを呼び寄せさせて何処かへ行き、しばらくたつて、クリスマスの三角帽やら仮面やら、デコレーションケーキやら七面鳥まで持ち込んで来て、四方に電話を掛けさせ、お知合いの方たちを呼び集め、大宴会をひらいて、いつもちつともお金

を持つていない人なのにと、バーのマダムが不審がつて、そつと問いただしてみたら、夫は平然と、昨夜のことを洗いざらいそのまま言うので、そのマダムも前から大谷とは他人の仲では無いらしく、とにかくそれは警察沙汰になつて騒ぎが大きくなつても、つまらないし、かえさなければなりませんと親身に言つて、お金はそのマダムがたてかえて、そうして夫に案内させ、中野のお店に来てくれたのだそうで、中野のお店のご亭主は私に向つて、

「たいがい、そんなところだろうとは思つていましたが、しかし、奥さん、あなたはよくその方角にお氣が附きましたね。大谷さんのお友だちにでも頼んだのですか」

とやはり私が、はじめからこうしてかえつて来るのを見越して、この

お店に先廻りして待つていたもののように考えているらしい口振りでしたから、私は笑つて、

「ええ、そりゃもう」

とだけ、答えて置きましたのです。

その翌る日からの私の生活は、今までとはまるで違つて、浮々した楽しいものになりました。さつそく電髪屋に行つて、髪の手入れも致しましたし、お化粧品も取りそろえまして、着物を縫い直したり、また、おかみさんから新しい白足袋を二足もいただき、これまでの胸の中の重苦しい思いが、きれいに拭^{ぬぐ}い去られた感じでした。

朝起きて坊やと二人で御飯をたべ、それから、お弁当をつくつて坊やを脊負い、中野にご出勤ということになり、大みそか、お正月、お店の

かきいれどきななので、椿屋つばきやの、さっちゃん、というのがお店での私の名前なのでございますが、そのさっちゃん毎日、眼のまわるくらいの大忙しで、二日に一度くらいは夫も飲みにやって参りまして、お勘定は私に払わせて、またふつといなくなり、夜おそく私のお店を覗のぞいて、「帰りませんか」

とそつと言ひ、私も首肯いて帰り支度をはじめ、一緒にたのしく家路をたどる事も、しばしばございました。

「なぜ、はじめからこうしなかったのでしょうか。とっても私は幸福よ」
「女には、幸福も不幸も無いものです」

「そうなの？　そう言われると、そんな気もして来るけど、それじゃ、男の人は、どうなの？」

「男には、不幸だけがあるんです。いつも恐怖と、戦ってばかりいるのです」

「わからないわ、私には。でも、いつまでも私、こんな生活をつづけて行きとうございますわ。椿屋のおじさんも、おばさんも、とてもいいお方ですもの」

「馬鹿なんですよ、あのひとたちは。田舎者ですよ。あれでなかなか張りでね。僕に飲ませて、おしまいには、もうけようと思つているのです」

「そりや商売ですもの、当り前だわ。だけど、それだけでも無いんじゃない？ あなたは、あのおかみさんを、かすめたでしょう」

「昔ね。おやじは、どう？ 氣附いているの？」

「ちゃんと知っているらしいわ。いろも出来、借金も出来、といつか

溜息まじりに言つてたわ」

「僕はね、キザのようですけど、死にたくて、仕様が無いんです。生れた時から、死ぬ事ばかり考えていたんだ。皆のためにも、死んだほうがいいんです。それはもう、たしかなんだ。それでいて、なかなか死ねない。へんな、こわい神様みたいなものが、僕の死ぬのを引きとめるのです」

「お仕事が、おありですから」

「仕事なんてものは、なんでも無いんです。傑作も駄作もありやしません。人がいいと言え、よくなるし、悪いと言え、悪くなるんです。ちやうど吐くいきと、引くいきみたいなものなんです。おそろしいのはね、この世の中の、どこかに神がいる、という事なんです。いるんでしょうね？」

「え？」

「いるんでしょうね？」

「私には、わかりませんわ」

「そう」

十日、二十日とお店にかよっているうちに、私には、椿屋にお酒を飲みに来ているお客さんがひとり残らず犯罪人ばかりだという事に、気がついてまいりました。夫などはまだまだ、優しいほうだと思ふようになりました。また、お店のお客さんばかりでなく、路を歩いている人みな、何か必ずうしろ暗い罪をかくしているように思われて来ました。立派な身なりの、五十年配の奥さんが、椿屋の勝手口にお酒を売りに来て、一升三百円、とはつきり言いまして、それはいまの相場にしては安

いほうですので、おかみさんがすぐに引きとつてやりましたが、水酒でした。あんな上品そうな奥さんさえ、こんな事をたくらまなければならなくなっている世の中で、我が身にうしろ暗いところが一つも無くて生きて行く事は、不可能だと思いました。ランプの遊びのように、マイナスを全部あつめるとプラスに変わるといふ事は、この世の道德には起り得ない事でしょうか。

神がいるなら、出て来て下さい！ 私は、お正月の末に、お店のお客にけがされました。

その夜は、雨が降っていました。夫は、あらわれませんでした。夫の昔からの知合いの出版のほうの方で、時たま私のところへ生活費をとどけて下さった矢島さんが、その同業のお方らしい、やはり矢島さんく

らしいの四十年配のお方と二人でお見えになり、お酒を飲みながら、お二人で声高く、大谷の女房がこんなところで働いているのは、よろしくないとか、よろしいとか、半分は冗談みたいに言い合い、私は笑いながら、「その奥さんは、どこにいらつしやるの？」

とたずねますと、矢島さんは、

「どこにいいのか知りませんがね、すくなくとも、椿屋のさっちゃんよりは、上品で綺麗だ」

と言いますので、

「やけるわね。大谷さんみたいな人となら、私は一夜でもいいから、添ってみたいわ。私はあんな、ずるいひとが好き」

「これだからねえ」

と矢島さんは、連れのお方のほうに顔を向け、口をゆがめて見せました。

その頃になると、私が大谷という詩人の女房だという事が、夫と一緒にやって来る記者のお方たちにも知られていましたし、またそのお方たちから聞いてわざわざ私をからかいにおいになる物好きなお方などもありまして、お店はにぎやかになる一方で、ご亭主のご機嫌もいよいよ、まんざらでございましたのです。

その夜は、それから矢島さんたちは紙の闇取引の商談などして、お帰りになったのは十時すぎで、私も今夜は雨も降るし、夫もあらわれそうもございませんでしたので、お客さんがまだひとり残っておりましてけれども、そろそろ帰り支度をはじめて、奥の六畳の隅に寝ている坊やを

抱き上げて脊負い、

「また、傘をお借りしますわ」

と小声でおかみさんにお頼みしますと、

「傘なら、おれも持っている。お送りしましょう」

とお店に一人のこつていた二十五、六の、痩せて小柄な工員ふうのお客さんが、まじめな顔をして立ち上りました。それは、私には今夜がはじめてのお客さんでした。

「はばかりさま。ひとり歩きには馴れていますから」

「いや、お宅は遠い。知っているんだ。おれも、小金井の、あの近所の者なんだ。お送りしましょう。おばさん、勘定をたのむ」

お店では三本飲んだだけで、そんなに酔ってもいないようでした。

一緒に電車に乗って、小金井で降りて、それから雨の降るまっくら
路を相合傘で、ならんで歩きました。その若いひとは、それまでほとん
ど無言でいたのですが、ぽつりぽつり言いはじめ、

「知っているのです。おれはね、あの大谷先生の詩のファンなのですよ。
おれもね、詩を書いているのですがね。そのうち、大谷先生に見ていた
だこうと思っていますのですがね。どうもね、あの大谷先生が、こわくてね」
家につきました。

「ありがとうございます。また、お店で」

「ええ、さようなら」

若いひとは、雨の中を帰って行きました。

深夜、がらがらと玄関のあく音に、眼をさましましたが、れいの夫の

泥酔のご帰宅かと思い、そのまま黙って寝ていましたら、

「ごめん下さい。大谷さん、ごめん下さい」

という男の声が致します。

起きて電燈をつけて玄関に出て見ますと、さっきの若いひとが、ほとんど直立できにくいくらいにふらふらして、

「奥さん、ごめんなさい。かえりにまた屋台で一ぱいやりましてね、実はね、おれの家は立川でね、駅へ行ってみたらもう、電車がねえんだ。奥さん、たのみます。泊めて下さい。ふとんも何も要りません。この玄関の式台でもいいのだ。あしたの朝の始発が出るまで、ごろ寝させて下さい。雨さえ降ってなけや、その辺の軒下にも寝るんだが、この雨では、そもいかねえ。たのみます」

「主人もおりませんし、こんな式台でよろしかったら、どうぞ」

と私は言い、破れた座蒲団を二枚、式台に持って行つてあげました。
「すみません。ああ酔つた」

と苦しうに小声で言い、すぐにそのまま式台に寝ころび、私が寢床に引返した時には、もう高いいびき鼾が聞えていました。

そうして、その翌る日のあけがた、私は、あつけなくその男の手にいれられました。

その日も私は、うわべは、やはり同じ様に、坊やを背負つて、お店の勤めに出かけました。

中野のお店の土間で、夫が、酒のはいったコップをテーブルの上に置いて、ひとりで新聞を読んでいました。コップに午前の陽の光が当つて、

きれいだと思いました。

「誰もいないの？」

夫は、私のほうを振り向いて見て、

「うん。おやじはまだ仕入れから帰らないし、ばあさんは、ちよつといままでお勝手のほうにいたようだったけど、いませんか？」

「ゆうべは、おいでにならなかったの？」

「来ました。椿屋のさっちゃんの顔を見ないとこのごろ眠れなくなつてね、十時すぎにここを覗いてみたら、いましがた帰りましたというのでね」

「それで？」

「泊っちゃいましたよ、ここへ。雨はざんざ降っているし」

「あたしも、こんどから、このお店にずっと泊めてもらう事にしようかしら」

「いいでしょう、それも」

「そうするわ。あの家をいつまでも借りてるのは、意味ないもの」

夫は、黙ってまた新聞に眼をそそぎ、

「やあ、また僕の悪口を書いている。エピキュリアンのにせ貴族だつてさ。こいつは、当っていない。神におびえるエピキュリアン、とでも言ったらよいのに。さっちゃん、ごらん、ここに僕のことを、人非人なんて書いていますよ。違ふよねえ。僕は今だから言うけれども、去年の暮にね、ここから五千円持って出たのは、さっちゃんと坊やに、あのお金で久しぶりのいいお正月をさせたかったからです。人非人でないから、あんな

事も仕出かすのです」

私は格別うれしくもなく、

「人非人でもいいじゃないの。私たちは、生きていさえすればいいのよ」
と言いました。

太宰 治 だざい おさむ

生 1909 年（明治 42 年）6 月 19 日、没 1948 年（昭和 23 年）6 月 13 日 本名、津島修治（つしましゅうじ）。昭和を代表する日本の小説家。津軽の大地主の六男として生まれる。共産主義運動から脱落して遺書のつもりで書いた第一創作集のタイトルは「晩年」（昭和 11 年）という。この時太宰は 27 歳だった。その後太平洋戦争に向う時期から戦争末期までの困難な間も、妥協を許さない創作活動を続けた数少ない作家の一人である。戦後「斜陽」（昭和 22 年）は大きな反響を呼び、若い読者をひきつけた。

ヴィヨンの妻

— うゐよんのつま —

電子書籍登録日 2011 年 2 月 2 日

iNovel



kaedebooks.com

カエデブックス

著者 太宰 治

収録 青空文庫

<http://www.aozora.gr.jp/>

電子書籍化 楓出版株式会社

<http://kaedebooks.com>

《作成No.0014》

※スマートフォン用の電子書籍として作成しました。



コピー OK 障害者 OK 学校教育 OK

利用の際は必ず下記サイトを閲覧下さい。
www.bunka.go.jp/jiyuriyo

※著作権消滅作品(PD)



Kaedebooks.com

カエデブックス

あなたの作品を電子書籍化します！

- ☒ 愛着のある作品だからきれいにしてあげたい。
- ☒ 昔書いた小説を誰かに読んで貰いたい。
- ☒ 懸賞小説に落ちた作品が手元にある。
- ☒ 電子書籍化してみたい。
- ☒ 多くの人に読んでもらいたい。

1 安心の規格

P D F ファイルで保存するので、ずっと手許においておくことが出来ます。

2 安心の価格で

プロに頼むと 10 万円はする組版を※ 1 万円以下からご提供し、電子書籍をもっと身近なものにします（※ 4 万字以下作品の場合）

3 PDF ファイル形式だから端末を選びません

お使いの P C や iPhone や iPad、スマートフォンで読むことが出来ます。

4 ダウンロード販売可能

作成した電子書籍はお客様のものになるので、その後はご自身の手で自由にブログに発表したり、ダウンロード販売していただくことができます。

kaedebooks.com
カエデブックス

詳しくは
こちらを
クリック

※この文書の内容は 2011 年 2 月当時のものです。
現状と内容が異なる場合がございます。



iNovel

iNovel とはスマートフォン
や携帯電話で読みやすくレイ
アウトされた PDF ファイル小
説の総称です。

